
第十三生徒会便覧

植木 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第十三生徒会便覧

【Nコード】

N9899J

【作者名】

植木 薫

【あらすじ】

甘楽学園唯一未公認の生徒会、第十三生徒会の二人が繰り広げる学園物語。彼らが公認される日は来るのか。

プロローグ

さて、こういう時どんな風にして書き始めればいいのか。

本来、生徒会の日誌ごときにそんな小説みたいな始め方なんて不要、というかアウトだと思う。

しかし、今更になって4月から真っ白な生徒会日誌が見つかり、

「全部書いておいてね。よろしく。」

なんて丸なげにされても覚えているはずも無く、少しでも見栄えを良くしようというせこい考えプラスやけくそまじりなのだ。

いや、正確には覚えていないというのは嘘である。

ただ、俺の頭の中でそれらは『第1級思い出したく無い事項』に認定しており、頭の隅で永遠に封印しておこうと無意識の内に働いた防衛機能のおかげで、今まではきれいさっぱり忘れていただけだ。

自分の手で古傷をえぐり返し、更にそれを公表するようなドMな真似はごめんなので、会長に忘れたと言い、なんとか抵抗を試みたのだが

「そう、覚えて無いならしょうがないわね。じゃあ新しい思い出を作ってあげるわね。今度は忘れられ無いようなのを。」

などと言われ、ささやかな抵抗はあつと言つ間に敗れさった。

トラウマをこれ以上増やされると、俺の人生の半分はトラウマでできています、なんてどこぞの風邪薬のようなキャッチフレーズがついてしまう。

生徒会の日誌なのだから生徒会長が書くべきだ、なんて言えるはずも無く、俺はしぶしぶながらも真っ白な生徒会日誌を開いた。

そのの1 入学式

4月、春、出会いの季節。

様々な生き物が古い殻を破り、新しく羽ばたく季節。

人間とてまたしかり。

そう、俺は生まれ変わるんだ！

なんて、振り返ってみると恥ずかしくて死んでしまいたいそんな事を真面目に考えながら俺は高校の入学式に向かっていた。

昔から親の転勤が多かったせいで同じ土地に1年といたためしが無く、付き合いの深い友達もできなかった。

というか、まあ、そう、あれだ、付き合いの深い友達どころか、友達ができなかったのだ。

これには引越しが多いという事に加えてもう一つ原因がある。

祖父がイギリス人であり、俺はいわゆるクォーターなのだ。

それだけなら問題は無いのだが、俺はどうも変な風にその遺伝子を受け継いでしまったらしい。

変に彫りが深いせいで相手を威嚇しているように見える顔

デフォルメで三白眼

日本人の黒目に、全体的に鈍い上に、所々くすんでいる金髪

つまりはためから見ると、どうみても不良、はたまたヤンキー、果てにはヤのつく自由業なのだ。

その類に間違えられた事も1度や2度では無い。

生徒指導の先生に地毛だと信じてもらえず、遅くまで説教を受け、

上級生からは呼び出しをくらい、

クラスメートに話しかけても怯えた表情で「す、すす、すいません、い、今はこれだけしか無いんです。」とお金を差し出され、

カツアゲしたと職員室に呼ばれ、（必死になって否定したが誤解は解けなかった）

道を歩いていると、それらしい格好をした人から絡まれそうになり、

… ああ、思い出すだけで涙がこぼれてくる

友達ができなかった原因としては引越より、こっちの方が比率が高いかもしれない。

弟にはいまだに手紙のやりとりをしている友達がいるそうだ。

…いや、過去を振り返るのはもうよそう。

そうだ、俺にはこれから輝かしい高校ライフが待っている！

この地で新しい人生を歩み始めるんだ！

きつと親友と呼べるような友達もできるはずだ！

可愛い彼女もできるかもしれない！

そつ、自己紹介の時に言う事も春休みを費やして考えてある。ただのお調子者でもなく、かと言って真面目過ぎず、完璧な自己紹介だ。

今思うと、本当にただの浮かれたバカである。

そつして、これからの生活に胸を踊らせながら歩いているうちに、学校が見えてくる。

私立甘楽学園

スポーツでは目立った特徴は無いが、県内ではそこそこの進学校らしい。

らしい、というのも願書を出す時間がほぼ無かったため（これにも深く悲しいエピソードがあるのだが、省略する。ただ、その日の夜、俺は一人ベッドで枕を濡らした事を言っておこう。）あまりよく

パンフレットを読まずに出願したからだ。
まあ、よつするにどこにでもあるような私立高校だと思っていた。

校門の近くまで来た所で、制服のネクタイをしっかりとしめ直す。

少し乱れているだけで、先生に睨まれてしまいかもしれない。

念には念を入れるべきなのだ。

そう思い学校の中に入って行く。

俺の行く手を阻むものは何も無い。

…何故か俺が進む方向に沿って、まるでモーセのごとく人垣が割れた。

校舎前の掲示板で自分のクラスを確認した後、教室へ向かう。

教室には既に数人の生徒がおり、談笑している姿も見られた。

だが、その談笑も俺がドアを開けて入って来た途端、「ひっ」という叫び声と共に打ち切られた。

俺は軽く泣きそうになるのを抑えながらも、一般的に特等席と呼ばれる窓際最後方の自分の席に着いた。

それから担任が入って来るまでの30分程の間、俺に話しかけて来る人がいなかったことは言うまでもないだろう。

その間、俺は何をしていたかというところ、落ち込む自分を必死になつて励ましていた。

まだまだ、まだチャンスはある。

自己紹介がお前には残っているじゃないか。

大丈夫だ、あの自己紹介さえあれば皆お前が本当はいい奴だって理解してくれるさ。

そうすればお前は皆の人気者だ。

そう、お前にはまだチャンスがあるんだ。

担任の自己紹介も終わり、入学式のため全員体育館へ移動する。

古今東西変わらない校長の挨拶で入学式が終わった後、教室に戻り自己紹介が始まった。

順番に出身中学や好きなアーティストなどが言われていく。

皆、ある程度緊張しながらもだいぶ和やかなムードだったため、スムーズに進んでいった。

このムードのままならば大丈夫なはずだ。

俺の目には既に楽しい3年間の高校生活が見えており、BGMとして友達を100人作っておにぎりを食べる歌が流れていた。いよいよ俺の番が回ってきた。

席を立ち、周りを見る。

そこに浮かぶ表情は怯えがほとんどだ。

と爆音が鳴り響いた。

震動こそ無かったものの、まるでミサイルでもおちてきたかのよう
な音だった。

クラスは騒然となり、担任は

「またあいつらか!!!」

と言って飛び出して行ってしまった。

だが、そんな爆音も俺の数千にも及ぶシュミレーションの敵では無
く、俺はすぐさまパターンS 32に切り換えて話し始めた。

ただ、他の生徒がそんなシュミレーションをしていたかという
そんなはずも無く、クラスが騒然とする中一人笑って自己紹介をす
るといふ、かなりシユールな展開になっていた。

クラスの面々が落ち着きを取り戻す頃には既に自己紹介を済まして
しまっておりてんぱる俺は、全員が注目する中

「……………よろしく願います。」

と言っことしかできなかった。

真っ白に燃えつきた俺は、理想郷がガラガラと崩れていく音を確か
に聞いた。

余談だが、爆音時笑っている俺を見てクラス全員が、

「こいつが犯人だ。」

と思っただけで疑わなかったらしい。

担任が戻って来る頃にはかなり時間が経っており、

「残りの自己紹介は、また明日ということだ。」

の一言で放課となった。

周りでは既に、友達関係が着々と築きあげられていっており、携帯で赤外線通信をしている奴らもいた。

その横で俺は、春休みを費やして完成させた計画『perfect human relations ver3.0』、通称『PH R3』の敗北にただ呆然と打ちひしがれていた。

だがしかし、俺はふと思いついた。

部活があるじゃないか

とてつもない衝撃が俺を襲った。

そうだ、部活だ。

今まではしょっちゅう転校していたため、入ろうと考えた事は無かったが、今度はそんなことは無い。

部活に入れば友達もできる。

一緒に青春の汗を流すことができる。

例え部活に入ったからといって、必ずしも友達ができるという事など無いのだが、その時の俺にそんな事を考えている余裕など無かった。

部活体験もすぐに始まるはずだ。

静かな決意を胸に秘め、俺は家に帰る事にした。

帰る途中、俺は気づかなかった。

普通の学校ならば活動しているはずの野球部、サッカー部に始まり、剣道、弓道、卓球、美術、吹奏楽、その他一切の部活の姿が見えないというところに。

そのの2 1週間後

俺が甘楽学園という所には部活が存在しない、ということを知ったのは入学式からちょうど一週間後のことである。

その日の朝のホームルームで担任は言った。

「今日から体験が始まるからな。3年間そこで過ごすのだから、しっかり考えて自分に合ったところを選べよ。…」

この時俺は、担任が部活の言っていると考えていた。

というか、それ意外の事を考えつく方が不思議だろう。

「…まあ、しかし、十二ある生徒会それぞれに、しっかりとした会則・方針が定められている。どの生徒会を選んでも充実した高校生活が送れるはずだ。…」

はい？

どういうことだ???

部活でなく生徒会の数が十二？

そんな話聞いたことがない。

後から高校のパンフレットを見てみるとちゃんと書いてあったのだが、その時には知る由も無い。

…そして、混乱しきっていた俺は聞きのがしてしまったのである。

最後に担任が付け加えた一言を…。

「…ああ、後、第二十二生徒会には決して入るなよ。まあ、あんなのに好き好んで入る奴はいないだろうが。…以上。」

ホームルームが終わった後、俺は担任のもとにかけよった。

「先生、どういう事ですか？」

「ん？何がだ？」

「何がだ、じゃないですよ。生徒会が十二もあるってどういうことですか！？」「どういうことも何も、言った通りだよ。お前、知らずに入学したのか？この学校には部活の代わりに、生徒会がいくつもあるんだよ。別に強制では無いが、今のところ全校生徒ほぼ全員が参加しているな。詳しい事は生徒手帳を読め。」

そう言っただけで担任は職員室へと去って行ってしまった。

俺はしょうがないので席へ戻り、鞆の中から入れたままになっていた生徒手帳を取り出して読み始めた。

…何度か読み直し、ようやくおおまかにではあるが理解できた。

まず、大体の内容は担任の言った通りである。

つまり、この学園には部活動なるものが一切存在せず、代わりに多数の生徒会が存在する。

生徒会の数は特に決まっているわけでは無く、会員がいなくなつて消滅したり、誰かが新しく発足させることもある。

ただ、ここ数年は十二で収まっているそうだ。

また、会員数もまちまちで、百人以上いるところもあれば、十人もいないところもあるらしい。

新しく生徒会を発足させる方法も書いてあったのだが、その気は無いのとばした。

生徒会はそれぞれ活動方針と会則を各々で決めていて、それに沿った活動をする。

そして、その生徒会をまとめる組織として生徒会の上には、生徒会総務部なるものが存在している。

この総務部の仕事はまず、それぞれの生徒会の会長が集まる総会でそれぞれの活動や人数を考慮した上での予算分配。

そして、それぞれの生徒会が方針に沿った活動しているかどうかのチェック。

また、生徒会を発足させようとする時も、ここに活動方針などをまとめた書類を提出し、OKを貰わないといけないそうだ。

本当はまだ細かい規定がたくさんあったのだが、まあこれくらい知っておけば十分はずだ。

つまり、他の学校でいうところの部活がこの学園の生徒会であり、生徒会が生徒会総務部だと考えて問題無いのだろう。

そういう事ならば何の問題も無い。

俺はただ単に、友達を作るためだけに部活に入ろうと考えていたのだから。

まあそんなわけで放課後になって見学を開始したのだが、……………迷ってしまった。

この学園の敷地はそこそけあるのだが、驚くほど広いわけではなく、構造が複雑なのだ。

あまりに複雑なために、敵との戦闘に備えて作ってある、なんてわけのわからない噂が流れるほどである。

…で、気づくと俺はどうやら体育館裏らしき所にいた。

こんな所で活動する生徒会なんて無いだろうと思いついて、戻ろうとする和不意に声が聞こえた。

あせった俺はついとっさに体育館の角に隠れてしまった。

そっと様子をうかがってみると、そこには2人の女子生徒がいた。

顔はよく見えないが、制服から判断するとどちらも2年のようであり、片方はアタツシエケースを手にもっていた。

そしてアタツシエケースを持った方が、アタツシエケースをもう一人に渡しながら話し始めた。

「いつもながら大変だったわ。」

「ん、確認しました。確かに。異常はありませんでしたか？」

「ああそう言えば、ソレの保管場所、机の上から2番目になってたわよ。全く、どれだけ焦ったことか。この分の手当はきっちりだしてもらおうよ。」

「…そうですね、おかしいですね。まあいいでしょう、分かりました。その分は追加しておきます。料金はいつもの所に。」

「まいどあり。」

そうしてアタツシエケースを受けとった方の生徒は、スタスタとどこかに行ってしまった。

その時の俺はというと、たった今行われた、どっからどうみても360°エブリシング怪しい取引を忘れようと必死だった。

「あの人たちが一体誰かなんて気にしたらだめだ。」

アタツシエケースの中身はきつと交換日記か何かだ。

そう気にしちゃダメだ気にしちゃダメだ気にしちゃダメだ気にしち

やダメだ。

nice boat」

気がつくとも目の前にアタッシェケースを渡した方が立っていた。

「……………」

「……………」

「それでは俺はこれで。」

「ちよつち待つてね。」

逃げようとした俺の肩をガツシリと掴まれ、無理矢理正面を向かされた。

制服のリボンの色から見ると、どうやら2年生のようだ

黒髪のシヨートがよく似合っている美人顔の彼女は、これまたとても艶やかな笑顔を浮かべて言った。

「見た？」

「イイエ、ナニモ。」

「さっきのアタッシェケースの中身何だと思う？」

「ナンノハナシデシヨウカ？」

「ふーん。そんな頭の悪いヤンキーみたいな顔して、しらばっくれ

るんだ。甘楽学園1年3組出席番号17番小鳥遊

たかなししぎ
四季君。」

「な、顔は関係無いでしょ!!!」

「あ、つつこむとこそつちなんだ。まあいいけどね。でも見られたからにはどうにかしないと。ねえねえ、沈むなら塩水の海とコンクリートの海どっちがいい？」

「そうですね、帰って温かいお風呂に沈みながらゆっくり考えますでは。」

「そっか、じゃーにー。…っておい!!!」

なかなかのノリのいい人だった。

「とにかく、あれを見られたからにはただで帰すわけにはいきません。あなたには私の監視下、つまり第十三生徒会に入ってもらいます。」

「ちなみに断つた場合は？」

「あら不思議、君が明日が学校に来ると、『小鳥遊は夜な夜な血を求めてさ迷い歩いている』とか『女の子の弱みを握って従わせている』なんて根も葉も無い噂が雨あらし」

「よろこんで入らせていただきます!!!」

ただでさえ、教師ににらまれている状況なのに、そんな噂まで流されたら一発KOだ。

「じゃ、これに名前とか書いてね。」

そう言つて差し込まれた手続の書類に、あらかた書き終わつてから
気づいた。

あれ？この学園の生徒会つて全部で十二じゃなかったか？

「…えつと、先輩は第何生徒会所属でしたっけ？」

「第十三つて言つたじゃん。それより、私のことは先輩じゃなくて
会長と呼びなさい。」

「…先輩、この学園には生徒会が十二のはずですが。」

「だから会長だつて。…まあ今のところ公認されてるのは十二だけ
だね。そんなことはどーでもいいんだよ、とりあえず四季つちは副
会長ね。」

「どつでもよくないです、てかなんで俺が副会長なんですか！」

「え？だつて他に誰もいないし。きゃっ、今二人つきりつてここで
Hなこと考えたでしょ。全くこれだから思春期の男の子は。」

だが、俺にはそんな下らないギャグを聞いている余裕なんてなかつ
た。

…2人だけ？

「なんで二人だけなんですか！？」

「え、何でつて言われても。まあ、とにかく詳しいことはまた明日、

放課後、二二二で。んじや。」

そうやって自分の言いたいことだけ言って、その人は帰ってしまった。

「…そういや、名前聞いてない。」

この時点で俺は既に、色々な事を諦めていたのだが、実は想像以上に自分の首がしまっているのには気づいていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9899j/>

第十三生徒会便覧

2011年10月6日00時03分発行